

心敬と本歌取

『落葉百韻』の「古畑山」の付句から――

伊藤伸江

一

康正二年（一四五六）から寛正六年（一四六五）の間に張行されたと推定される『落葉百韻』は、本能寺第四世日明のもと、心敬が宗匠として臨んだ連歌である。この中に、次のような付句がある。¹

やすきかたなきそはのかけはし

貞興

鳥も居ぬ古畑山の木は枯れて

心敬

この付合は、百韻の中では、二折裏最終句（第五〇句）と三折表第一句（第五一句）にあたっている。心敬の句は、百韻の後半の始発の句であり、宗匠として連衆の句作の新たな展開を促すために配慮を見せるべき位置で詠まれた句なのである。それゆえ、心敬の句は、細く続く崖ぞいの道を詠んだ前句の情景に付けて、山の情景を詠み出して詩境を広げ、鳥、畑、木といった次句の作句のきっかけとなる素材を巧みに加えたものとなっている。

心敬と本歌取

さらに、心敬が、山の情景で付けるにあたって用いた「古畑（山）」「鳥」「木」の語句は、前句「そは」と合わせて、有名な西行歌「古畑のそはの立木にある鳩の友呼ぶ声のすぎき夕暮」（新古今集・雑中・一六七六）を意識させる。『連珠合璧集』には、この西行歌からつくられた寄合「鳩トアラバ、…友よぶそわのたつき」「そわトアラバ、かけ路かけはし　はた　たつ木」があり、²そこから考えても、心敬の付句は、西行の歌を本歌として付けていると考えることができる。心敬の句と同様に、西行歌の語句を使用した付合としては、やや遅れて、宗祇の『三島千句』第四百韻、三折表の第二、三句³

みやまがくれに鳩の鳴くこゑ

庵むすぶ岨の古畑秋暮て

があるのだが、この宗祇の付合と、心敬の付句とは、同一歌を背景とした作句ではあるが、性質が相違するように思われる。

この論では、『落葉百韻』第五一句をきっかけとして、心敬の

一

連歌における本歌取に対する考え方を検討し、第五一句の具体的な手法から、心敬の句作が目指していたものを考えたい。

二

まず、『落葉百韻』の付合を検討する。貞興の前句にある「そは(岨)」は、山の急斜面。『日葡辞書』で「Soga ソワ(岨) 山の横斜面」と注し、また「Sonano cagedgino tcutai yuqu. (岨の碓路を伝ひ行く) 絶壁に沿って険しい所や道を通って行く。」と例文をあげている。「かけはし(梯)」は、板をさしかけて作った斜面の道であり、「そはのかけはし(岨の梯)」は、けわしい斜面に沿って、通行用に板を柵のようにさしかけて作った道という。それゆえ、この句一句では「簡単にすすめるようなところのない、急斜面の梯の道」という意味となる。

続いて、心敬の句であるが、先に述べたように、前句の「そは」から西行歌「古畑のそはの立木にゐる鳩の友呼ぶ声のすこき夕暮」(新古今集・雑中・一六七六)にある語句「古畑」「木」を呼びこんでおり、明らかに西行歌を意識して句をつくっていることがわかる。

西行の歌の「古畑」とは、『新古今集』の古注では「久シク作りナドモセヌ、畑ナルベシ。ハタトハ、山ヲ打返シテ、物ヲツク

ルヲイフ也」(京大図書館本新古今注⁵)、「つくりあらしたるはた也」(甲南女子大学図書館本九代集抄⁶)などと説明される、現在は耕されず放置されている山畑である。「畑」とは、屋敷や垣内に近接した「畠」とは意味が相違し⁷、原生林を焼き払った後、灰を肥料にしてそこを畑とし、数年間耕作した後に、また木々が生えそろうまで数十年から数十年も放置する、そのような作業でつくられる焼畑を意味すると考えられる。

なお、焼畑を作る際には、小灌木は切り倒しても、巨木は倒さず枝のみを打ち払い、焼き払うゆえ、黒こげとなった幹のみの枯れ木がそこに残るといふ⁸。その際には、西行の見た「立木」には、「急斜面の一区画「ふるはた」に林立する焼け焦げの木々」⁹が混じる場合も想像され、一段と荒涼たるイメージを持つであろう。急斜面に放置され荒れたままの古畑に、残されて立っている木。その木に、焼畑の作物を荒らす害鳥である山鳩¹⁰も今は所在なげにとまっております、友を呼ぶかのように真に寂しげに鳴いている、そんな夕暮れ時の光景であった。

さて、「古畑」という語は、連歌にはそれほど多くはない。が、文安年間から見いだせ、畑で作られる作物、実景を詠み込み、耕作をする意の「打つ」を入れる作例が見られる。「よもぎもあさもふかき夏草／さと、をき山のふるはたよもうたじ」(文

安雪千句第八百韻・八八／八九・日晟／行動^⑪や、「おりゐるとりのあさるふる畑／身のうへをうち忘るればおどろかで」（行動句集・一八八九／一八九〇）^⑫、心敬にも「風うちそよぐ山のかたはら／ふる畑にたてるかれ柴散やらで」（吾妻辺云捨・五五五／五五六）^⑬等がある。が、『太閤周阿百番連歌合』の第五二番右の前句「鳩ふく声の近き古畑」がやや西行歌を意識したかと思われる^⑭以外、西行歌に依ったと思われる「古畑」の作例は、心敬のこの句まで管見に入らない。

さらに、「古畑山」は、和歌、連歌を通じて管見に入ったのは、心敬の詠むこの一例のみであるが、焼畑の様を表わす「畑焼く山」には「もみぢ葉を畑焼く山とながむらん土佐のとわたる秋の舟人」（草根集・渡紅葉・三三三〇）、「風吹く松を煙にあらはして畑焼く山や鳶のみみぢ葉」（松下集・鳶風・二二三五）と、正徹や正広に、紅葉を畑を焼く火にたとえる歌例があった。連歌においても宗祇に「おく山すみの春のあはれさ／そことなく峯に畑やく火は見えて」（下草（金子本）・八九五／八九六）^⑮という句がある。春に山に火を放って焼き、畑とする様、また焼かれてつぐられた畑の様は、いずれも山中で多く見られる光景であり、「古畑山」は、一旦畑とされ耕作された斜面の土地に、再び柴や茅、灌木などがおおいはじめ荒れた様を見せている山、放置され

た畑によって、遠目にも荒れた山であろう。

従って、この付合は、「気もゆるめられない、けわしい斜面の梯の道。あたりはしばらく耕されていない古畑で、その古畑が斜面に開かれた山は、木は枯れはてた姿をさらしていて、鳥もいないのだ。」といった意味となる。

この時、心敬の句は、西行歌の「古畑」から、「古畑山」と情景を大きく広げている。西行歌の「鳩」を明らかに思わせる「鳥」を出しながらも、「鳥」と一般化し、さらに鳥の姿が今は見えないという状況にしている。また西行歌の「立木」を思わせる「木」を出しながらも、その木に関しては「木は枯れて」と既に葉を落として枯れ木となつてしまつてゐることを詠み入れている。もとの光景から大きく広げ、俯瞰した景と、その情景に至るまでにそこに流れた長い時間を思わせる鳥や木の様。喪失や不在という、本歌に起こつた新たな状況を感じさせる句を心敬はつくりだしているのである。

この時期の付合で、『落葉百韻』の心敬句以外に、明らかに西行の『新古今集』一六七六歌からの本歌取をしたと見られるのは、管見の及ぶ範囲では、『熊野千句』第四百韻第八八、八九句^⑯

古はた作る木曾の山里 鶴丸

五月雨に岨の棧朽そひぬ

宗怡

と、先に出した宗祇の『三鳥千句』第四百韻第五二句、五三句

みやまがくれに鳩の鳴くこゑ

庵むすぶ唄の古畑秋暮て

のみである。『熊野千句』は、「古畑」と「唄」の寄合と、やはり西行の和歌「波と見ゆる雪をわけてぞこぎ渡るきそのかけはしそこも見えねば」（山家集・雑・一四三三）から寄合となった、「未曾」と「かけはし」の二組の語句で付けており、付合としては、西行の古畑の歌の情景からは離れていく。また、宗祇の場合、「鳩の鳴くこゑ」に、「唄」「古畑」「暮れ」と、西行歌の内容から語句を素直にちりばめた形である。心敬以外の同時期の連歌作者たちは、「鳥も居ぬ」「木は枯れて」と、西行歌の様子をさらにつき進めたような状況を句の情景にしていこうという発想はなかったのである。

二

心敬は、連歌の勉強にあたり、和歌を同時に学ぶことを強く求めた。心敬の考えを、彼が門人たちにあてた連歌指導書から見てみよう。

まず、『所々返答』第二状では、次のように和歌を学ぶことの特長を述べる。

歌には、歌はだとして、此事肝要至極の用心なる歟。連歌師は心にさのみかけ侍らずや。いか計おもしろく利根の好士も、さめはだにふしくれだちて、くどきたてたる結構物、おほく見え侍歟。はだ美しくて、常の句のしみぐとしたる、大切の好士にや。其上に、文曲冷えやせたるは、いはぬ最尊の事なるや。古賢の秀逸といへるは、みな一ふしに言ひ流したる物也。結構の物、杣山の手斧目の残りたるはあるべからず。大むね、世間の先達になり給はん好士は、歌をならべて修行稽古あるべき事か。歌の方欠け侍ては、かたくななる事おほく、たけ・しなのかたをくれ侍るべく哉。されば、救済法師は藤谷黄門の為相卿の弟子といへり。梵灯庵主、為秀卿弟子となり。

和歌には独特のなめらかな表現があり、その特有な肌合いをマスターすることが大切であること、肌合いがきまかくなめらかで、普通に詠んだ句でしみじみした味わいがある句を詠むのが、上手な連歌作者であり、さらに引き締まって深い情趣をたたえた句ならば、言うまでもなく最高の句である。昔の作者の優れた句とは、(いろいろなことをつめこんでうるさくせず) 一つのことだけで引き締まった詠み方の句であり、そうした秀句は歌の修行によって生まれるといったことを丁寧に説いている。その際、著

名な連歌師の和歌の師として冷泉家の歌人をあげており、和歌を正徹に学んだ心敬の立場が理解しうる。

また、『所々返答』第一状に、学ぶべき歌、歌書を弟子に示している。

古人秀歌ども、古今集・新古今集などの内の名歌の姿、自讃・三体など、言葉面影を日夜むねに工夫なくては、まことの歌連歌のことはり・姿・眼をば悟りがたく哉。これらの庭訓、清岩和尚毎々申給へる事也。

正徹の教えとして、『古今集』、『新古今集』、『自讃歌』、『三体和歌』などにおさめられた名歌を学ばねば、和歌も連歌もその筋道や姿、眼目の理解がかなわないうことを説いており、やはり冷泉流の歌学を伝えていよう。

ところが、『所々返答』第二状では、頓阿の言葉を用いる形で、万葉集から三代集までの勅撰集に関しては、「聖人の糟粕」との理解を示している。

清岩和尚、尤冷泉家の随一末葉なれども、「われはいづれもうるさく侍り。くだりははてたる家をは尊まず。ただ俊成・定家のむねのうちを学び侍る」とつねに語り給へる、かしこくありがたくこそ覚侍れ。頓阿法師などもねんごろに注し残て云、「万葉三代集は聖人の糟粕なり。いたづらに心を尽くす

心敬と本歌取

べからず。ただ歌は節物の雲風草木にむかひ、眼前の心を動かさば、かならず道にいたるべし」といへる、おなじ心にこそ。了俊注しをき侍るにも、「此道は、いかさまにも人をへつらひ侍らん心のあらん好士は、生々世々にもいたるべからず。人丸・赤人にも越べしと心をばもち侍べしと。努々古人のかすはきをなむることなかれ」などいひ給へり。此三賢たちの心ざし、まことに衆鳥同林にあそぶ心にひとし。

心敬は、正徹・頓阿・了俊を「三賢」とくくって持ち出し、その中で『万葉集』と三代集を低く評価している。正徹の独自の歌道に対する姿勢、了俊の自覚的な作歌姿勢（『落書露頭』の言葉による）を前後に語り、正徹と同一の姿勢を頓阿も持っていると言るのである。

同様に、『私用抄』でも、連歌の学習に関し「ひとへに、眼をとど頭をかたぶけ、胸のうちの工夫の上なるべし」と述べ、頓阿の言葉として次に引用する。

頓阿法師、愚問賢注とやらんにも、万葉・三代集は古人の糟粕、努々心をつやすべからず。ただ、節物にむかひて心ひとつにて作侍るものといへる、かしこくはづかしく哉。げにも、作を案じ侍るに、他人の才智一塵もむねに残りては、出でこぬ道也。

だが、これらの頓阿の言葉、万葉から三代集が「聖人の糟粕」「古人の糟粕」であるという見解は、『愚問賢注』の、二条良基から発せられた第一番目の問いで、「或人云」「難云」と対比して述べられた、和歌に関する二つの態度のうちの一つに見られたものであった¹⁷⁾。

或人云、哥は人物いまださだまらざるさきより其旨存せりといへども、二儀あひわかれて六義又おこれり。情、中にうごき、言、外にあらはる。されば花になく鶯、水にすむ蛙のこゑまでも哥謡にあらずといふことなし。物にふれて情性を吟詠する外に別の事あるべからず。万葉三代集以下みな聖人の糟粕なり。たゞ風雲草木に対して眼前の風景をありのまゝに詠すれば、をのづから発明の期あるべし。いたづらに古語をかり旧典を学事なかれ。万葉猶軌範とするにたらず。いはむや三代集以下、其実おちて其花のみのこれり。真実胸中よりあたらしき風情をめぐらしてありのまゝに詠すべき也。

「難云」の方は、和歌は「たゞ中にうごく情をいひ出せるにはあらず」とし、「万葉の古語も三代集の艶言もひろく学て俗言俗態をさるべきなり」との意見であり、「此両篇、いづれを是とすべきをや」と問われた頓阿は、『愚問賢注』の答えでは、「難の心尤正義にかなへるにや」と「或人云」の考えをしりぞけ、万葉、三

代集の言葉を学び使うことを主張している¹⁸⁾。にもかかわらず、心敬は、『新古今集』の歌人、和歌を高く評価する正徹の教えにひきつけて、「或人云」の見解を頓阿の意見として肯定して使い、万葉、三代集に「心をつやすべからず」との主張につなげてためらわない。二条派の重鎮頓阿を持ち出したのは、連歌の弟子たちへの頓阿の名声の浸透ぶりを勘案して、自らの教えの効果の増強をねらったのではないかと思われるが、『愚問賢注』を「愚問賢注とやらん」と軽く扱い、それを意識的に読み違える態度に、心敬の立場を見る。『愚問賢注』の「或人云」「難云」という二つの態度は、後にはそれぞれ冷泉家の考えと二条家の考えを代表すると読み取られていったようであるが、はやく心敬は「或人云」の主張を冷泉派の正徹の考えと同様と見なしていた。

また、心敬は、頓阿の発言をねじまげ、万葉、三代集を低く評価するのみならず、『私用抄』では、

定家云、「三代集に（き）はめてゑせ歌おほし」との給へり。八雲抄などにも、其代々の名匠を出だし給へるに、一人二人ばかりなり。

とも記し、藤原定家（定家の発言の部分はおそらく『桐火桶』の記述による²⁰⁾）も順徳院も三代集を評価しておらず、三代集によい歌、よい歌人は少ないと述べることで、三代集を低く見る考えを

補強している。

そもそも歌の詠み方に関しては、「心は新しきを先とす。人の未だ詠ぜざる心を求めて、これを詠ず。詞は古きを求めて用ゐるべし。詞は三代集を出づべからず。」(『詠歌大概』²¹)がとりわけ二条派に尊重されたが、心敬は、無批判に撰集の歌言葉を取ることに対し、独自の立場に立つており、きびしい批判をなしている。

例えば、『ひとりごと』では、次のように、『古今集』などの代々の集の歌が必ずしも優れているわけではないと戒め、上古の歌から考えもなく言葉を取り、取捨選択もせず学ぼうとする風潮に対して警鐘を鳴らし、はっきりと否定している。

かたへの好士たち、いかばかり拙き言葉をも、代々集にあり、古人の本歌とて、用心なくあらく敷こと(ど)も云ひ散らし侍る、いささか用捨有べくや。代々集にも、ゑせ歌ども入侍らではかなはぬならひ也。ことに上臈・権門たち、数を知らず入給へば、其内によるしからぬ、なま／＼しくあら／＼しき歌もおほかるべく哉。古今集などさへ秀歌のみにはあらずといへり。いにしへより、代々つぎさまの歌ども入れ侍り。撰者の越度には有べからずと也。又、証歌などにはいかばかりの歌ども(も)たつべく哉。偏(に)学ばん事は、用捨なくては無念の事侍るべしと也。神代・万葉集などの歌

心敬と本歌取

ども、注ことはり先達に尋ねあきらめて学ぶべしと也。上古は代もあがり人の心もすなほにて、今の世のくだり果てたるには合はぬことのみ多かるべし。

「上古は」以下の一文は、「萬葉はげに世も上り、人の心もまして此世には学ぶとも及べからず」(『毎月抄』)による。²³心敬は『ささめごと』において、見るべき歌書として、『八雲御抄』²⁴から『万葉集』、三代集、伊勢物語を、俊成の言から「源氏・狭衣」をあげた。さらに『万葉集』に関しては、「寛平已往の歌に心をかけ侍らば、なでう道にいたらざらん」との『近代秀歌』の定家の発言をあげ、この「寛平已往の歌」は「万葉集のこと也」と言う。²⁵歌書としての『万葉集』自体は評価すべき書と考へたのであり、学習者側に歌の選択を強く求めるのである。

そして、こうした万葉、三代集を盲信することを警戒する姿勢から、古歌を発想の原点とすることが求められる本歌取において、使用できる本歌を峻別する姿勢も生み出されてくる。

加えて、一般に本歌取は「われとめづらしうよみたらんには、猶おとるべくや」(『八雲御抄』)とされるものであり、本歌取の詳細な説明で一章(巻二「取本歌事」)を立てる『井蛙抄』²⁶でも、『八雲御抄』にならない、その言葉を引いて「わざとめかしくみ、に立て、是をとりたるをせんにて、我心も詞もなき、返、此道の

魔なり。」と、本歌を取ってくることだけに終始し、自分の思いも言葉もない歌を厳しく戒めていた。まして「無常遷変のことはり身にとをり、何の上にも忘ざらん人の作ならでは、まことに感情あるべからず。詞は心の使といへり。げにも只今消え侍らん此身の不思議を忘れて、有相道理の上のみの作にては、ふとり結構なるも理ならずや。」(『岩橋跋文』)と歌道について述べる心敬の立場では、まず自らの心の思いがあるべきであり、本歌取は推奨されるべき手法とはなりえない。

『私用抄』もまた、「胸のうちの工夫」を重視する態度から、又、人ごとにあまりに上古を怖ぢおそれ侍る程に、をのが智を失へる事侍る歎。已往の古人に、きはめて仏道にも諸道にも悟りのよこしまなるおほかるべし。(中略)大むね、あまりに上代の歌などをば、本歌・支証の才智に稽古と覚悟すべく哉。

と述べる。心敬は『岩橋跋文』で「三代集の比まではいまだ上代」と考えており、『私用抄』では、この頃までの時代の歌は本歌・支証に用いるために覚えるべきものだと限定さえする。これは上古の歌を自らの独創でつくりだした歌よりも低く見、悪い歌も多いからこそ、上古の歌は単に本歌取を為す時の知識として覚えておけばよいと言っていると見ることが出来る。本歌取の際に

は使うけれども、すべての歌を盲信するには及ばないとの姿勢である。

さらに『所々返答』第三状でも、

定家卿云、「堀川院辺好士、言葉心つたなくいやしく侍る」との給へり。

と定家の言葉を使い、『堀河百首』の頃の歌人の歌を批判した。万葉、三代集のみならず、源俊賴（27）に代表される『堀河百首』の頃の時代まで広く批判していることになる。

ここで、和歌における本歌取の範囲を見ると、『愚問賢注』の頓阿の答えでは、勅撰集は『後拾遺集』まで、有名な古歌なら『堀河百首』も取つてよいとしている。ただ、『井蛙抄』で「近代、俊頼歌などはやうく／＼とる事になりたり。それも猶ちかき歌を取にたり。歌をとらむには、なをふるき歌をとるべきなり」と『八雲御抄』の発言を引き、『堀河百首』作者以降への範囲の拡張は考えていない。これに対して、二条良基の態度はより自由であり、『近來風躰』（28）では「本歌には堀河院百首の作者までをとるなり」としながらも、「いまは金葉・詞花・千載・新古今などをとりたらむはなにかくるしかるべき」と、『新古今集』まで取つてよいと考えており、連歌もやはり『新古今集』まで取つてよいと示した。だが、『正徹物語』（29）によれば、正徹は、和歌に

は「堀河院百首の作者の外も、其時の人の哥をば、皆本歌に取べき也」とし、西行も堀河院の時代からの歌人と考え、西行の歌も本歌に取つてよいという形での、『堀河百首』の時点を意識した線引きをしている。やはり、本歌取とは、『堀河百首』までの古歌を本歌に取るべきという前提のある技法であった。しかも、二条派の意識の中では、より古い時代の歌が本歌にふさわしいとされる技法である。これまで見て来た心敬の指導書の記述は、上古の歌一辺倒に言信する姿勢を一貫して批判するものであり、それを思えば、本歌取を連歌に適用するとしても、心敬は積極的に推奨、指導するという立場になりえないのである。

実際、心敬は、連歌の本歌取に関し、ほとんど記述を残していない。そして、それが本歌取という手法に否定的な意識からであったことは、『心敬法印庭訓』で、心敬の教えとして兼載が述べた次のような記述からはつきりとわかる。

一、歌にも連歌にも本歌をとる事好むべからず。かなはぬ也。又をのづからよく寄り来たる所にてはよろし。その歌の面影うかぶはいかにもおもしろし。いづれにも世にあるほどの事、歌にても古事にても、又万葉・伊勢物語・源氏・狭衣などをもよく見心得べし。さて、それを毎々取り出だすことは見ぐるし。見ぐるしとて知らぬは無下也。俊成卿六百

番にも、「源氏見ざらむ歌人無下のことなるべし」と申されし。

心敬は、和歌においても連歌においても、本歌取は効果が得られないとして否定的である。「かなはぬ也」には、一般の連歌作者風情では、どうせうまく取れはしないのだという厳しい口吻すら感じられるように思われる。彼の基本的な立場は本歌取には賛成しかねるというものであった。が、自然と境地が似通い、本歌の面影が新たな歌や句に添うて浮かぶような創意であるならば、それはおもしろいと評価している。『ささめごと』での言及同様、『万葉集』も「面影うかぶ」歌や句を作るために学ぶのは結構と考えている。だが本歌取の手法をマスターするための基本的な勉強は推奨しつつも、決して手法としては好んで勧めてはいない様子が見てとれよう。

四

それでは、『落葉百韻』の第五一句は、どのような発想から付けられていったものであろうか。

西行の歌には「すごし」という形容詞が使われている。この語は、急斜面の古畑にある立木に止まっている鳩が、友を呼んで鳴いている声、そしてその声が聞える夕暮れ時の雰囲気全体を表現

する、一首内で重要な役割を果たす語であるが、「すごし」は、西行の歌に五例見られる以外には、和泉式部の歌「秋風はすごく吹くとも葛の葉のうらみがほにはみえじとぞおもふ」(新古今集・雑下・一八二二)と、慈円の歌に二例見られる程度の、和歌に使用されることが非常に稀な語である。

「すごし」は、はやく平安期から、風情ある風の音や、楽器や虫の音、鳥や鹿の声、読経の声、水の音、人里はなれた住居や空の様子などに使われてきており、季節は秋もしくは冬、時刻は明け方や夕暮れに使用される語句であった。心敬と同時期においても、正徹の『源氏一滴集』が、「言はん方なきすごき言の葉」という帯木の巻の「すごし」の用例に対し、「すごき 寂寞心ホソキコトヲ云也」と注しており、この語の主たる意味合いは言いようもないほどの寂しさであると理解されていた。

連歌においては、『看聞日記』紙背に書き留められた伏見宮家の連歌⁽²⁸⁾に集中的に使われており、例えば、「秋のかごとかすごき夕ぐれ／もるころの山田にとをき鹿なきて」(応永廿二年二月一日唐何百韻・一四／一五・庭田重有／無記名)、「旧里の庭も野らなる萩ちりて／山かげすごき秋のくれかた」(同百韻・四一／四二・綾小路資興／治仁王)のように、同一の百韻で二度用いられた用例や、「所がら月もうき世に須間の里／あかしのうらもすご

き秋風」(応永二八年二月廿五日何船百韻・四一／四二・無記名／禅啓)、「罪なくは心の月の晴やせん／高野の寺のすごき松風」(応永三三年一月二日何路百韻・五九／六〇・善喜／庭田重有)などの用例がある。詠み方としては、秋の夕暮れ、秋の風、鹿の音などに「すごき」を用い、心細い、ひどく寂しい様を表現していた。

続いては、心敬と行助の句の前句に見られるが、中でも、『竹林抄』に二例、いずれも心敬の句の前句として、この語が同一の形(「すごき秋風」)で入り、荒涼たる寂しさを表現しているものがある。⁽²⁹⁾

吹きとし吹くはすごき秋風

枯る、野の一むら薄ひとつ松 心敬(竹林抄・五八九)

とふかひなしやすごき秋風

暮ぬとて陰たのむ野のひとつ松 心敬(竹林抄・一〇四八)

加えて、『心敬法印庭訓』には、次のように記されている。

一、下手の好むものども、松の落葉 さびしき すごき 鳥

羽田もる、(後略)

一、心持ち肝要にて候。(中略) 心はふとく欲心をかまへ、あたたかなるあてがひにて、詞ばかりにうく・つらき・かなしき・あぢきなき・世をいとふ・身を捨つるとのまいへど

も、かたはらいたくこそ候へ。しみこほりもせず候。あはれなる事をあはれといひ、さびしきことをさびしきといひ、しづかなることをしづかといふ、曲なき事也。心にふくむべきにて候。

「すごき」が誰にでも手軽に使われやすい流行の詞であったこと、「うく」とか「つらき」とかいった感情をそのまま詠み出す詞を生半可な気持ちで使うことは、見苦しく、透徹したきびしい句境にならないことが述べられている。先の『看聞日記』紙背連歌の例からも、「すごき」が伏見宮家の連歌会、すなわち専門連歌師を交えない連歌の場で頻繁に使われた語であったことがわかり、心敬はそうした傾向を「下手の好むもの」と切り捨てている。『心敬法印庭訓』の言い方からも、「さびしきことをさびしき」といふことは、何の工夫もなく苦々しいやり方である。その点を考えれば、『竹林抄』に取られた付合は、心敬が、「すごき」といふ語句を持った、いわば欠点のある前句をいかに付けたかが焦点となる。

そして、『竹林抄』のいずれの心敬の付句も、前句に表現された寂しさを、野中にただ一本だけ生えている孤独な古木の松の姿に転じて付ける。その句には、松が耐えてきた長い孤独な時間も表現されてくることになる。さらにまた、「一叢薄」は古今集歌

「君が植ゑしひとむらすすき虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな」（古今集・哀傷・八五三・御春有助）から、今は亡き人へのしづめる。心敬は、冷え冷えとした寂しさを表わす語句を安易に使用したよくあるイメージの前句を、付句に具体的な事象を用いて、ただ一人抱える孤独な時間の経過を感じさせる付合につくりあげていたのである。

心敬の説を伝えていると推測される『新古今拔書』、『新古今拔書抄』には、西行の「古畑」の歌の注は見られない。だが、「すごき」を持つ前句に対する付合例から、心敬は、西行の「古畑」の歌が用いた歌句「すごき」からも、心が細るような寂しさを読み取り、その詩情をふくらませていかんとしていたであろう。『落葉百韻』第五一句にも、そうした心敬の手法が込められていると考えられよう。

五

あらためて『落葉百韻』第五一句を見よう。詠まれているのは、「鳥も居ぬ」、即ち鳥の声のしない、静まりかえった古畑山の光景であるが、「鳥の声」は、どのようなイメージを持つ表現であったのか。

和歌では、鳥は山に住みさえず、山家の身近な生き物とし

て、その生徳を景に詠まれている。例えば、『風雅集』に、次のような歌例がある。

山家鳥

伏見院

山陰や竹のあなたに入日落ちて林の鳥の声ぞあらそふ

(風雅集・雑中・一七八〇)

人里離れた山では、都では聞かれない鳥たちの盛んな鳴き声が近々とする。そして、さらに山奥に分け入れれば、鳥の音もしなくなる。

詠み人しらず

とぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ

(古今集・恋一・五三五)

ふかき山里に人のたづねくるもなくて、なにとなくものあはれなるに
前左兵衛督惟方

人はいはじ鳥も声せぬ山路にもあればあらるる身にこそありけれ
(風雅集・雑中・一七八四)

山家鳥

ここもただ人はとひこず鳥の音のきこえぬほどの太山ならねど
(垂槐集・一〇三八)

山家鳥

あはれをもしらでぞ過る鳥の音も聞えぬ山の奥のすまはは

(草根集・二〇〇・応永廿六年十月一夜百首)

連歌においても、「鳥の声」とは山の景を彩るものであって、

その声が聞えることは人跡まれであることを示し、次の『文安月千句』⁽³⁵⁾『小鴨千句』⁽³⁶⁾の例のように、寂しさの表現であった。

空に又立もわかれず霧ふりて 正信

山陰さびし色鳥の声 専順

(文安月千句第六百韻・五五／五六)

とりのこゑく聞ぞさびしき 量阿

すむさとも竹よりおくはかすかにて 心敬

(小鴨千句第九百韻・七四／七五)

専順の句は、秋の景物である「色鳥」の声にあわせて山陰の寂しさを詠み、量阿の句も鳥の「こゑく」、複数の鳥の声が聞えるにもかかわらず「さびしき」境地が読まれていた。その寂しさは、定家の和歌「さとびたる犬の声にぞしられる竹より奥の人の家居は」(玉葉・雑・二二五七・藤原定家)の一節を使用した心敬の句により、田舎の、人家まばらな里の寂しさとなる。

だが、前章において見たように、「さびしき」も、「すごき」と同じく、「下手の好むもの」であり、あからさまに句に詠み込むものではないと心敬が考えていた語句であった。おそらく、心敬は、あからさまな量阿の句の表現を、定家の雑歌の一節を使用し

て、『源氏物語』浮舟の巻の情景をも響かせ、「かすか」という表現で田舎の、人家まばらな里の様子を表現することで事物の中に包み込んで消していかなとしたのであろう。

そして、心敬は、堪え難いほどの寂しさを次の歌のように表現した。

閑中雪

思ひ絶え待たじとすれば鳥だにも声せぬ雪の夕暮れの山

(権大僧都心敬集・六九)

『芝草句内岩橋下』³⁷では、この歌(歌題は「閑山雪」となっている)に、

さしも、山居にはとふ人のおもひをたえ待るに、ふりくる、
雪のゆふべは、鳥だにも、一こゑせねば、さびしさにたへか
ね、とはぬ人の、いまさらまたれ侍る、たゞ雪の底の夕にた
へかねたる感情をいへり。

と注する。雪に降り込められ、物音一つしない夕暮れ時の山の庵の寂しさが、「鳥の声」がないことにより、こらえがたいものとなる。深山に本来あるはずの音がない、そのいぶかしさを詠む「鳥の音もきこえぬ山のさびしきは雪にこもれる宿の夕暮」(嘉元百首・雪・一一五四・小倉実教)、「鳥の声松の嵐の音もせず山しづかなる雪の夕ぐれ」(風雅集・百番歌合に、山雪を)・八二

心敬と本歌取

六・永福門院)のような類歌があるが、永福門院歌の「しづかなる」、実教歌の「さびしき」、こうした語句がない心敬の和歌こそは、自注で述べるように、堪え難い寂しさのきわみを表現せんとしたものである。心敬は究極の寂しさの表現として、「鳥だにも声せぬ」雪に埋もれた山の庵の様子を表現した。とすれば、「古畑山」の句の「鳥も居ぬ」も、心敬にとつては、「人も居ぬ」とを示唆する、「鳥の声」を使って表現できる限りの寂しさの表現であった。

続いて、「木は枯れて」という語句はどうであろうか。この語句は、管見では『菟玖波集』の「鶴の林」を詠んだ一例をのぞき、すべて心敬、宗祇の時期の連歌に見られる。

しぐれの雲み見るも冷じ
雄鹿鳴峯よりつゞく木は枯て
のこる落ばのくつる山かけ

〔春はまた〕宗祇独吟何船百韻第八／九／一〇³⁸
花たちはなのうつろへるくれ 印孝
程もなく枝に霜をく木は枯て 宗祇

(川越千句第五百韻第三二／二三)³⁹
かへり水無瀬の宿の古道
山もとの滝もあらはに木は枯れて 能阿

あとなき雪の橋のたえぐ

山川のみなみあさく木は枯て

(園塵第二・冬・四五二／四五三)⁽⁴⁾

いずれの例も、葉をすべて落とした冬場の落葉樹の様を表現していることがわかる。中でも、『竹林抄』の能阿の句は、『老いのすさみ』で「落葉しはてて、宿のかよひも古みちとなりて、枯木の中に滝のすさまじく落ちたるさま」と注される。⁽¹⁾『春はまた』

宗祇独吟何船百韻』第八句の「冷じ」とあわせ見れば、「木は枯れて」という情景が与える荒れ果てた印象がはつきりする。『園塵第二』には「明がたの霜の夜がらす立うかれ／枯木にみれば月もすさまじ」(冬・四四六／四四七)という、枯木寒鴉の景もあり、「枯木」にやはり「すさまじ」という語句が導かれ、「冬枯れのすさまじげなる山里に月のすむこそあはれなりけれ」(玉葉集・冬・九〇四・西行)の影響も思われる。それゆえ、心敬が用いた「木は枯れて」という語句は、ひどく寒々とした冬の物寂しさ、「すさまじき」さまを表現しているのである。

このように見てくると、『落葉百韻』第五一句において、心敬の用いた語句は、「すこし」「さびし」「すさまじ」といった言葉で形容される荒涼たる状況を思わせるものばかりであり、そうし

た詞の重なりによって、西行歌の持つイメージがさらにとぎまされ、深まっていく。鳥がいなくなる、木が枯れるといった語句が表現している過ぎ去った時の流れも、本歌の面影を背後に持つことで感じられ、西行歌の持つ寂しさをさらに強めて伝える役割を果たしている。心敬は、本歌のイメージを一段と強く句に示すために、時の経過を詠み込んで、新たな景にこまをすすめたのであった。

六

二条派の主要な歌論書『愚問賢注』や『井蛙抄』は、本歌取の技法の整理に意を用いた。例えば『愚問賢注』は、「本哥の詞をあらぬものにとりなして上下に置けり」「本哥の心をとりにて風情をかへたる哥」「本哥に贈答したる躰」「本哥の心になりかへりて、しかも本哥をへつらはずして、あたらしき心をよめる躰」「たゞ詞一をとりにたる哥」と分類している。だが、心敬は、先に見たように『愚問賢注』の文言を正確に引用しておらず、『愚問賢注』に全くとらわれていない。二条派のように類型化された本歌取の方法に従い、本歌取をなすのは心敬の望む所ではなかった。『心敬法印庭訓』に記された、本歌取に対する発言を見て、「をのづからよく寄り来たる所にてはよろし」と消極的であ

る。心敬は、結果的に本歌取と分類されるような、いわば心敬流の本歌取をなしていたのである。

これに対して、宗祇は連歌論書で積極的に弟子に本歌取を指導し、初期の連歌論『長六文』においては、次のような趣旨を述べる。⁽⁴⁾

一、本歌取様之事

くやしきぞ汲初てける浅ければ袖のみぬる山の井の井の水

此歌をとりて付候はんには山の井、又袖ぬるるに山の井をくむ（などは）能心にあひ候。くやしきと云句に山の井難付候哉。其故は、此歌は恋の心にてしたてたる歌にて候間、くやしきは恋によりたる詞に候間、山の井は相違候。

宗祇は、歌意をきちんと把握して、正しく寄り合う詞を付けろと言い、付け方の細部を教えようとする。このような宗祇と心敬との態度の違いは、やはり宗祇と心敬の古畑の句の相違につながつてこよう。

さらに、心敬は「もなし」という語句を頻用していることが、先学の研究により明らかであるが、彼の句は、この語句が示す様な消失の思いが加えられることで、句境に深みが増していると考

えることができる。また、付合において「風」を素材とする句を多く詠み込むことも指摘されており、その心敬の手法には、今ではなくなつてしまった物たちの不在に対する、愛惜の念のこもつた時の流れを、空白の場を満たす「風」の存在で示すという句作りの技法を含んでいたと言える。そうした試み同様、古畑山の付句も、本歌から時が流れた後の状況を句にすることで、本歌と句の間に連続するもはやかえらぬ時間の流れを感じ取らせ、『心敬法印庭訓』の言う「その歌の面影うかぶはいかにもおもしろし」という状況をつくり出している。「古畑山」の句の本歌取は、本歌から心敬が読み取った心情、西行歌の眼目である「すこし」という状況をいかに十全にとらえるかという、心敬の思ひのかかつた手法であつたのである。

〈注〉

※論中に引用した和歌は『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』によつた。心敬関係の連歌論書は、中世の文学『連歌論集三』（昭和六〇・三弥井書店）による。また、資料引用の際には、必要に応じて、清濁、句読点を私に付し、表記を改めた場合がある。

(1) 『落葉百韻』の引用は『連歌貴重文献集成 第四集』（昭和五五・勉誠社）所収本能寺本により、私に清濁を付し漢字を当てている。また稿者は奥田勲氏と共に「本能寺蔵『落葉百韻』訳注（一）付、『落葉百韻』翻刻及び解説」（平成二二・愛知県立大学日本文化学部論集国

語国文学科編第一号)で百韻の翻刻と解説をなし、「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(三)付『落葉百韻』調査記録」(平成三三・『愛知県立大学日本化学部論集国語国文学科編第二号』)にて、第五〇句までの訳注をなしている。

- (2) 引用は中世の文学『連歌論集二』(昭和六〇・三弥井書店)による。
- (3) 引用は古典文庫『千句連歌集 五』(昭和五九)所収鶴見大学蔵本による。なお、書陵部本『三島千句注』(金子金治郎『連歌古注釈の研究』(昭和四九・角川書店)所収)は、三折表第三句に「へ古畑の岨のたつ木にあるはとの友よぶさゝのすいきたぐれ、と云哥の心也。」と注している。
- (4) 引用は『邦訳日葡辞書』(昭和五五・岩波書店)による。
- (5) 引用は『新古今集古注集成 中世古注編1』(平成九・笠間書院)による。
- (6) 引用は『新古今集古注集成 中世古注編1』(平成九・笠間書院)による。
- (7) 黒田日出男「中世の「焔」と「畑」」(『日本中世開発史の研究』(昭和五九・校倉書房)所収)。
- (8) 野本寛一『焼畑民俗文化論』(昭和五九・雄山閣出版)。
- (9) 松岡心平「西行の「ふるはた」の歌」(平成二・日本古典文学会会報No.116)。
- (10) (8) 書参照。
- (11) 引用は古典文庫『千句連歌集 二』(昭和五五)所収東大寺図書館本による。
- (12) 引用は貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』(昭和五〇・角川書店)による。
- (13) 引用は貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)による。
- (14) 引用は『連歌百韻集』(昭和五〇・汲古書院)所収静嘉堂文庫蔵連

歌集書本による。ただ、この付合は「鳩ふく声の近き古畑／はかりなくますえの鷹を手に居て(周阿)」であり、西行歌のイメージで付けていくものではない。

- (15) 引用は貴重古典籍叢刊12『宗祇句集一』(昭和五二・角川書店)所収金子金治郎氏蔵本による。
- (16) 引用は古典文庫『千句連歌集 五』(昭和五九)所収静嘉堂文庫本による。
- (17) 引用は『歌論歌学集成 第十卷』(平成一一・三弥井書店)による。
- (18) 『愚問賢注』において、頓阿が、心敬が頓阿の言葉とする意見を非難する立場であったことは、『連歌論集三』所収『所々返答』私用抄』当該箇所の頭注(木藤才蔵氏)で指摘されている。
- (19) ソウル大学蔵『愚問賢注開書』(中京大学蔵『愚問賢注抄出』は、「或云」に關し「冷泉家意地をいへり」と注する。(鈴木元『室町の歌学と連歌』(平成九・新典社)第四章、翻刻)
- (20) 木藤才蔵『ささめごとの研究』(平成二・臨川書店)第三部5「定家関係の歌論書の影響」に「桐火桶に依って記した可能性の相当強いものである」との指摘がある。
- (21) 引用は中世の文学『歌論集二』(昭和四六・三弥井書店)による。
- (22) 例えば、『ささめごと』には、二条派の尊崇する『詠歌大概』からの引用が見られない(注(20) 書第三部4「依拠した歌論書について」で指摘されている)。
- (23) 引用は、中世の文学『歌論集二』(昭和四六・三弥井書店)による。注(20) 書第三部5「定家関係の歌論書の影響」に『毎月抄』からの引用との指摘がある。なお、和歌の時代区分において心敬の言う「上古」は、万葉集の時代のみならず、本文中に引用した『岩橋跋文』『所々返答』第三状での用法から、堀河百首の時代までも含む広範な時代のイメージであると考えられる。
- (24) 引用は『日本歌学大系別巻三』(昭和三九・風間書房)による。

(25) 注(20) 書に指摘がある。

(26) 引用は『歌論歌学集成 第十卷』(平成一一・三弥井書店)による。

(27) 心敬は、『所々返答』第 一 状、第三状、『ひとりごと』で、俊成による俊頼批判の逸話を語っており、俊成の口を借りて、俊頼の詠作態度は心敬のめざす句作態度と相違することを強く述べている。

(28) 引用は『歌論歌学集成 第十卷』(平成一一・三弥井書店)による。

(29) 引用は『歌論歌学集成 第十一卷』(平成一二・三弥井書店)による。

(30) 梅野きみ子「『すし』考——平安朝の用例をめぐって——」(『平安文学研究』46号・一九七一・六)参照。後に「すし」関係の諸論文をまとめて同氏「えんとその周辺平安文学の美的語彙の研究」(昭和五四・笠間書院)所収。

(31) 引用は『未刊国文古注釈大系第十一冊』(昭和一一・帝国教育会出版部)による。

(32) 引用は図書寮叢刊『看聞日記紙背文書・別記』(昭和四〇・養徳社)による。

(33) 引用は新日本古典文学大系『竹林抄』平成三・岩波書店)による。

(34) 『新古今集古注集成 中世古注編一』(平成九・笠間書院)所収解説参照。

(35) 引用は古典文庫『千句連歌集 二』(昭和五五)所収静嘉堂文庫本による。

(36) 引用は古典文庫『千句連歌集 三』(昭和五六)所収小松天満宮蔵本による。

(37) 引用は『連歌貴重文献集成 第五集』(昭和五四・勉誠社)所収本能寺本による。

(38) 「春はまた」百韻の引用は、『連歌百韻集』(昭和五〇・汲古書院)による。

(39) 『川越千句』の引用は、古典文庫『千句連歌集 五』(昭和五九)による。

(40) 『園塵第二』の引用は続群書類従本による。

(41) 引用は中世の文学『連歌論集 二』(昭和五七・三弥井書店)による。

(42) 引用は中世の文学『連歌論集 三』(昭和五七・三弥井書店)による。

(43) 荒木良雄『心敬』(昭和二三・創元社)、湯浅清『心敬の研究』(昭和五二・風間書房)、山根清隆『心敬の表現論』(昭和五八・桜楓社)などに言及されている。

(44) 金子金治郎『新撰菟玖波集の研究』(昭和四四・風間書房)第三編第五章二「風素材句の付合」に言及がある。

(45) この点に関しては別稿「心敬の詩学——寛正六年正月十五日何人百韻」の宗祇付句評から——(『国語と国文学』第八九卷第三号掲載予定)を留意した。

※本論は科研費基盤研究(C)「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」による成果である。

(いとうのぶえ・愛知県立大学教授)